



6月下旬財務省理財局の職員の視察がありました。この話を聞いた時には、財務省がなぜと驚きましたが、村椿市長とは県庁勤務時代の同僚だったそうで、県庁に出張したついでに市長を訪問し、そのまたついでに介護福祉に関心があるので「まごころ見学」ということになったそうです。この4月に行われた厚労省の改革では、介護施設の「共生」が主要課題となっています。開設当初から共生の理念を掲げ高齢者・障がい児(者)を共に受け入れ、最近では開かれた介護施設として地域の人たちとの共生を目指しているまごころに白羽の矢が立ったということなのでしょう。今まで役人の視察は何回か受けたのですが、たいてい時間調整のための見学で、遅れてきて次の視察のために時間通りに帰っていくというのがほとんどでした。だから今回もそんな感じだろうと思っていました。国有財産や国債に関する財務省理財局の職員が福祉施設を見学するなんて考えられなかったのです。しかし、うれしいことにこの予想は外れました。予定時間1時間というのは、介護の楽しさを話すには十分な時間ではありませんが、理財局の職員は質問を交えながら共生の必然性、地域の人たちとの交流の意義など多くの話を聞いてくれました。



そんな話の中で、まごころは「他の施設での対応が難しいと思われる人の受け入れを頼まれることが多い」という話が出ました。その時に理財局の人から「対応の難しい人がまごころで落ち着くのは何故だと思うか」とい

う質問がありました。

理由はいくつか考えられますが、その場では次の2つを答えとしました。

まず、寺がやっているデイサービスだからという答えです。高齢の人たちには信仰心があります。宗派が違ってても寺というだけで手を合わせます。デイサービスに行こうと言うと嫌だという人も、寺に行こうと誘うと来てくださいます。立派な建物ではないけれど、寺という雰囲気だけで親近感が湧き、仏様の前ということで落ち着くのでしょう。もう一つは「利用者本位」の理念を追求しているということです。その時には「利用者の嫌がることをしない」という表現をしたように思います。まごころのモットーに「ダメ・無理と言わない」「利用者に振り回されることをよしとする」というのがあります。あれをしてはダメ、これもダメと指示し行動を止め、利用者が恥ずかしく思ったり嫌な気持ちになったりするようなことはしないというのが基本方針です。施設という権威で以て、いわゆる管理をすれば、利用者に振り回さ



れることはありません。職員はどうしたらいいか・・・と悩むことはありません。何かしたいと言われても、こう決まっています、と言えばそれで済みます。しかしまごころにはそんな規則は何もありません。その場その場で、利用者の言動に対して「本当は何を求めているのかを想像し、その求めや思いをかなえるためにどうすればいいか」と考えながら接している。こんな趣旨のことを答えました。この後、私は何故かとつさに答えた自分の答えの先を考え続けていました。

最近、「徘徊」という言葉に抵抗感を抱き、この言葉を使わないという自治体が増えています。朝日新聞は今年の3月から「徘徊」という言葉を使わず「一人歩き」や「散歩に出て道に迷う」という表現に変えたと聞いています。認知症の人であっても、出かけるときは何か目的があったのです。途中でそれを忘れてしまっただけのことです。私たちが、2階に物を取りに行き、「さて、私は何を取りに来たのか」と思うようなものです。こういうことが続くと自分でもショックです。きっと認知症の人たちもどこに行くつもりだったのか分からなくなり、道に迷うという現実にはショックでしょう。外出した理由が思い出せず道に迷い困っているのに周囲の人からは叱

られる。認知症の人が混乱するのも当然です。

有川浩の「明日の子供たち」という児童養護施設を舞台にした小説にこんな言葉があります。『子供が問題行動を起こすときは、何かの理屈があるはずですよ。それを探り出せてないことが問題なんです。子供の資質のせいにするべきではありません』



分家の食事会の様子です

高齢者も同じことです。私たちから見ると徘徊に限らず、大声を出す、乱暴な言い方をする、職員や他の利用者に指示を出す、食べ物を吐き出すなど問題行動と思われることにも意味があります。介護がうまくいかないのは、私たちにその行動の理由が分からないからなのです。介護のプロであるにも関わらず問題行動を起こす理由が分からないのです。問題行動をおこす利用者が問題なのではなく、理由が分からない私たちが問題なのです。理由が分からないのに、分かろうとする努力をせずに権力や力で止めてはいけません。理由が分からないなら、とりあえず、すべきことは、安全にその行動がとれるように見守ること、または周囲の利用者との調整を図ることだと思います。「そんなこと認めていたら大変なことになる」という言葉はよく聞きます。しかし、自分が大変だから相手の行動を止めるというのは、介護の基本である「利用者本位」の考えから外れることになります。また「そうしたいけれど、人手が足りないからね」とも言われます。これも職員の人数の問題ではありません。相手を理解し気持ちの中に入ろうという思いがなければ、職員は何人いても管理主義の介護となります。

歳を取っても自宅で暮らしたい。認知症になっても当たり前の生活をしたい、それは誰もが望むことです。誤嚥するから胃ろうにする。確かに食べなければのどを詰

まらせることはありません。転ぶ恐れがあるから車いすにする。確かに歩かなければ転ぶことはありません。勝手に外出すると危ないからと鍵をかければ、一人で外出して事故に遭うことも道に迷うこともありません。でもそれは人間らしい生活でしょうか。認知症や体が不自由になったら当たり前の生活は諦めなければならないのでしょうか。確かに当たり前の生活には危険が伴います。でも安全を迫及すると人間らしい生活はなくなります。私は、認知症だからこそ、体が不自由だからこそ、当たり前の人間らしい普通の生活をしてもらいたいと思います。徘徊や問題行動を止めるのではなく、言葉も忘れてしまった高齢者の声にならない声を聴き、行動の中にある気持ちを読み取り理解し一緒に生活しようとする。そんな思いと行動と覚悟が必要なのだと思います。私自身はあえてそんなリスクを覚悟し人間らしい普通の生活続ける介護を受けたいと思います。

理財局の職員の「認知症高齢者が落ち着いて過ごすのはなぜか」という質問は、私に介護の本質を考えさせるきっかけとなりました。たった1時間の中で介護の本質を突いた質問が出来るという意味で、やっぱり財務省理財局の人は頭のいいエリートです。



7月の行事予定

- | | |
|------------------------|-----------------|
| 4日(水) | ハーモニカ演奏 |
| 5日(木) | きれいな小物づくり |
| 9日(月) | ピアノと一緒に唄を歌おう |
| 18日(水) | 三味線と民謡 |
| 20日(金) | お菓子又は惣菜づくり |
| 26日(木) | みんなで歌う歌謡ショー |
| 30日(月) | おしゃべりしながら楽しい食事会 |
| ☆誰でも参加できます。お声をかけてください。 | |